

異形の神への願い

松平定信の心願書

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信 65 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

明治のはじめ、幕府瓦解による江戸市中の経済混乱で職を失う者が続出し、新首都東京には生活困難な極貧の大人・子どもがあふれていました。そうした人たちを收容する施設として「会議所」附養育院が設けられました。会議所とは、江戸幕府が積み立てていた莫大な救貧基金「七分積金（しちぶつみきん）」を管理運用する組織で、明治五年に作られました。

江戸幕府の救貧基金「七分積金」は、老中松平定信が始めた事業です。飢饉発生など非常時にそなえる「備荒貯蓄」と、貧しい人に米を支給する目的で、お金と米が蓄えられました。寛政の改革の一環です。

当時、大飢饉により米の価格が上がり、全国各地で暴動（一揆・打ちこわし）が起きていました。

老中松平定信は、世の中の混乱が収まることを神に願う「心願書」を書き、本所吉祥院の歓喜天（かんぎてん）という神に奉納しました。

心願書は「米の値段が下がり、お金の食料の流通がよくなって、幕府の政事の効果が人々にいきわたりますよう、自分の命と妻子の命をかけてお願いします。もしかなわないのなら、今すぐ自分の命を奪って死なせてください」と書かれています。命を顧みない、文字通り必死の懇願です。この心願書の写しは渋沢栄一の解説文とともに額装され、渋沢栄一院長時代から養育院の院長室に掲げられていました。

明治のはじめの養育院の運営資金は松平定信が創設した七分積金によるものですが、渋沢栄一がそれを知ったのは、会議所の運営メンバーに加わり養育院運営に間接的に関わるようになってからです。松平定信の心願書も、渋沢は養育院の職員から教わりました。

渋沢は「今ある養育院は、楽翁公（松平定信）あつたればこそ」と考えました。（参考 櫻園通信二十四号）

渋沢はこの心願書についてたびたび語っていますが、とくに「自分だけでなく妻子の命をかけた心願で「若し自分の願を聞き届けて下さらぬならば、どうぞ私を殺して戴きたい、独り私の命ばかりでなく、妻子眷族が罰を受けても、一向恨みと思ひませぬ」（*1）という点には必ず触れました。

そして、それは**定信公の容易ならぬ覚悟・熾烈なる精神・身を捨てかかる大覚悟**の表れと渋沢は説明していました。



白河楽翁の心願書と渋沢栄一の解説

渋沢栄一の時代から、旧養育院長室に、額が飾られていた。昭和20年4月の米軍による空襲で、養育院の多くの部分が焼夷弾に焼かれた。本院の多くの建物は焼失、107名の犠牲者が出、コンクリートの代替像になっていた渋沢像も焼け焦げた。養育院に関する多くの歴史的資料もこのとき焼失したが、養育院長室からこの額は持ち出された。それほど大切にされたものであり、現在は装幀しなおして展示ケースに収まっている。江戸時代、白河藩主松平定信（白河楽翁）が筆頭老中になり寛政の改革に乗り出したとき、吉祥天に納めた心願書の写しである。松平定信の作った七部積金の制度に対する感謝の念こめられた渋沢の贊（解説文）が組み合わされて、一つの額にしてあるのである。まづ右側の白河楽翁の心願書である。



さて、松平定信が心願書を奉納した歓喜天（かんぎてん）とはどういう神様でしょうか。歓喜天は仏教の守護神のひとつで、聖天（しょうてん）ともいいます。歓喜天は一人ではなく、象の顔をした男女の神が立って抱き合っている姿をしています。二人で一つの神という変わった姿です。

その神像は厨子に納められて秘仏として扱われることが多いようです。

渋沢栄一は、自身の著書で定信の心願書について「定信公の決意の熾烈さ」とは違う観点の意見を書いています。

◆
怪異不可思議の事を信ずると否とは、必ずしもその人の学問・知識の程度によるものでは無いらしい。存外な学者で幽霊を信じたりする者がある。

(略)
白河楽翁公の如きは、学問もあり智慧も優れ、精神の立派な人物であらせられたにかかわらず、従来談話した中にも既に申述べ置けるごとく、幕府の老中に任ぜらるるや、自分の一命は素より、

妻子眷族の生命までも懸けて、窃に深川の聖天様へ起誓せられて居る。楽翁公に似合はしからぬ事だと思ふが、怪異を信ずると否とは、その人の学問なぞよりもむしろ、かえつてその人の教育やら境遇に因ることゆえ、楽翁公は御出生が元来殿様なるため、幼少の頃より奥女中なぞにかのごとき迷信じみた思想を吹き込まれて来た結果、我々から観れば馬鹿気て見ゆるごと起誓などを、正心誠意のほとばしつた余り、あえてせらるるに至つたものだらうと思ふ。(略)

◆
この文章は渋沢栄一が八十二歳のときに刊行された著書に載っています。

江戸の困窮民を新制度で救った楽翁松平定信の偉業を生涯称賛し続けた渋沢栄一ですが、異形の神に自分だけでなく妻子眷属の命も捧げるといふ行動には強い違和感を感じていたようです。

非合理的な思考を退け、何事も理性的合理的に考えることを旨とした渋沢の態度を見ることができます。

聖天



平安時代の図像集 別尊雜記
(心覚撰) 卷四十一より

*1 東京市養育院月報 第339号・第114頁 昭和4年10月 多摩川園に於ける『ロータリー』倶楽部の院児招待に対する謝辞(養育院長子爵渋沢栄一): 渋沢栄一伝記史料第30巻 p.263-266

*2 実験論語処世談 (渋沢栄一著) 第599-601頁 [大正11年12月] 【流行の神様】: 渋沢栄一伝記史料第1巻 p.179-